

2017 年は、宗教改革 500 年の記念の年にあたります。伝承によれば 1517 年 10 月 31 日にヴィッテンベルク城教会の門扉に、その教会の説教者であったマルティン・ルターが『95 箇条の提題＝贖宥の効力についての討論』という文書を掲げたと言われており、それが宗教改革の発端となったというのです。

10 月 31 日にそのようなことをしたのは、次の日の 11 月 1 日がカトリック教会の定める「諸聖人の日」であり、その功德にあずかるべく多くの信徒たちがミサに集うことを狙って提題を貼り出したと言われてきました。しかしながらその通説は現在では疑われています。というのもルターが掲げた「提題」は、ラテン語で書かれていて一般民衆が読めるはずもなかったからです。むしろヴィッテンベルク城教会の献堂記念日にあたる 10 月 31 日に、当時の慣例に従って聖書釈義の教授であったルターが、ヴィッテンベルク大学の仲間の教授たちに神学問題に関わる議論を呼びかけたというのが実際のところであるようです。その内容が教会の贖宥状販売に関わる批判を含むものであったために、何者かによって直ちにドイツ語に翻訳され、開発されて間もない活版印刷術の力も手伝って、燎原の火のごとく瞬間にドイツ全土、更にはヨーロッパ中に知れ渡ってしまったということのようです。

カトリック教会には、死後直ちに天国へ行けず、地獄にも墜ちなかった人たちが、苦しみによって罪を償い、天国に赴く備えをする煉獄の教えがあります。贖宥状とはその煉獄での罪の償いを軽減するための証明書でした。当時の教皇レオ 10 世はサン・ピエトロ大聖堂改築のための資金を得るために全贖宥を公示し、贖宥状購入者に全免償を与えることを公示しました。それに目をつけフッガ一家から多大な借金をして大聖堂建築資金を教皇に貢ぎ、自領内での贖宥状の独占販売権を手にしたのがマインツ大司教アルブレヒトでした。さらにその営業活動を中心的に担ったのがドミニコ会士ヨハン・テツェルです。まさに「煉獄の沙汰も金次第」ということですが、ルターは『95 箇条の提題』のなかで「箱の中に投げ入れられた金がチャリンと鳴るや否や、魂が煉獄から飛び上がるという人たちは、人間を宣べ伝えているのである」（命題 27）とその行為を鋭く批判しました。

宗教改革は西欧近代社会を形成する原動力の一つとなった歴史的出来事と言えますが、そこで提示された人間理解は、人間の無限の可能性や自由を謳歌するヒューマニズムではなく、生まれながらに人間は皆罪人なのだという聖書的な人間理解でした。神を神とせず、自らを神としようとする人間の傲慢、罪が真剣に問われる人間理解と言えるでしょう。だからこそ命題 1 では「わたしたちの主であるイエス・キリストが、『悔い改めよ』と言われた時、彼は信ずる者の全生涯が悔い改めであることを欲したもうたのである」と告げられています。それは単に自分を責めることに終始する自己嫌悪に閉じこもることではなく、そこからイエス・キリストを信じる信仰以外には救われず、「それのみ」の救いを見上げることによる解放にほかなりません。罪人としての現実を率直に承認し、にもかかわらず圧倒的なキリスト・イエスによる愛と赦しの恵みに信頼する「信仰のみ」の確かなる希望がそこには息づいています。

現代の日本の政界、言論界には、自分たちの暗い過去を直視することから逃避し、自虐、自虐と叫んでは自己に酔いしれ、民族的な高ぶりを煽るような言説が満ち溢れています。私たちは 15 年にわたる戦争が生み出した悲惨とその責任を痛感することを忘却してはなりません。それだけにルターの訴えが、いまここにおける私たちへの訴えとして大きく豊かに響いてくるのです。

「わたしたちの主であるイエス・キリストが、『悔い改めよ』と言われた時、彼は信ずる者の全生涯が悔い改めであることを欲したもうたのである。」